
慈 恵



平成29年 春季号

No.58

宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



円相自画賛

箇々圓成

九十五叟 耕山

この円相は、左回りに描かれているが、墨気澄徹し貫禄充分で、収筆はまことに軽妙、脱俗この上ない。

円相のゆがみや、賛や落款のそれも、作為によるものではなく、ごく自然に出来たものである。よって、いつ見ても斬新だ。

とは言っても、そこにはほぼ四十年「骨や筋肉にまで教えこむ」といった鍛練があった。

だからこそ、天然と一体となった境地を、かくも自由に表現できたのである。

「禅画報」より

肩書などいらん

北垣国道男爵が、京都府の知事をつとめていた時のことである。

ある日、東福寺の濟門敬冲和尚を訪ねた。侍僧が名刺を受けとって敬冲に面会を取りついだ。敬冲和尚、名刺を一見してそれを投げすてた。

「なに、京都府知事だと。わしは知事なんかには用はないから、そういえ」

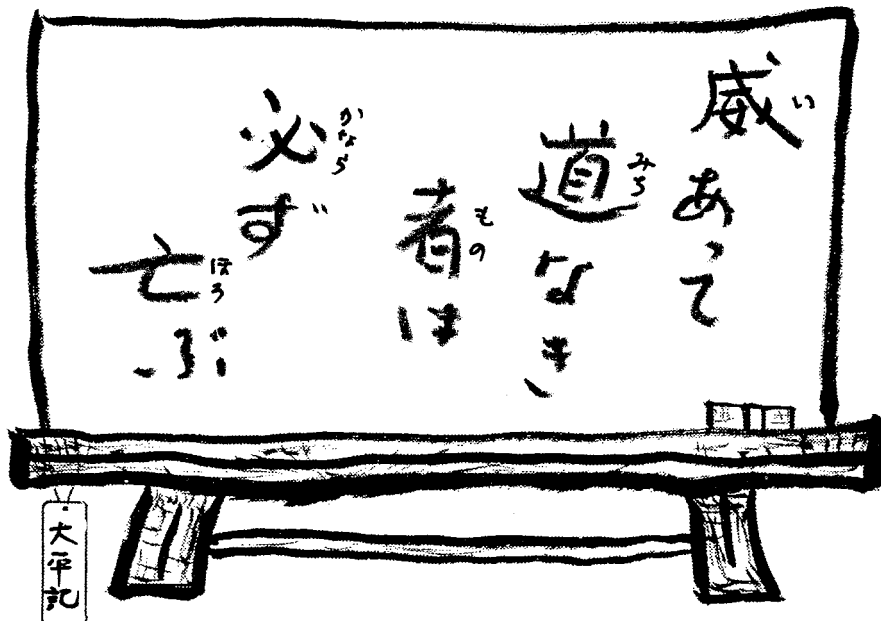
ところが、それを国道は、壁をへだてて聞いていた。名刺を取り戻し、鉛筆で「京都府知事」の五字を抹消して、再び侍僧にわたした。敬冲和尚、それを見て、「うん、北垣か、北垣ならここへ通れといえ」

「禅門逸話集成」より

さいもんけいちゅう
濟門敬冲 (一八二四〜一九〇五)

臨濟宗。諡は文幢。美濃に生まれる。瑞龍寺天沢僧堂で雪潭に参じ、その印可を受けた。東京海禅寺、天沢僧堂を経て、明治十七年、東福寺管長となった。

掲示板





「来る年も…」

三鷹市 藤井 隆子(78)

まだ暗い中で「ニイ！ニイ！」と秘かな声で、私を起す。ガビはキジトラのおばちゃん猫です。

「早々と大きいのを出したのね」

と、仕方なく起きて、チップの中の大きく暖かなかたまりを拾い出して、チップを元の平らなトイレに直す。

時は午前四時頃。一言声をかける。「いつもお元気で何よりですね」

そっぽ向いて毛づくろいしているガビをそのままに

残りの眠りに入ってしまう私

私とガビの朝の仕事である。目をさますと、ヴェランダにサンサンと注ぐ中で、横になって、すっかり落ち着いているガビ。

遅い朝食後、あたふたと午前の家事や外出を済まして帰って来ると、彼女はまだお日様につつまれている。ランチは食卓の上の器のまぐろを、婆ちゃんと一緒に取る。いい年をして私はまつたりと箸を動かす。誰も見てないテレビが、同じニュースを流している。

二時間程婆ちゃんは、大好きな読書に入る。本は「伊達正宗八巻」だ。ガビはどうぞお好きにと、となりのダイニングの椅子の上でまゐるまゐって眠ってる。

おやつを食べると、早めに夕飯の仕度を始めると、ガビも何かせかせかと動き出す。一寸空き時間が出来る

ると、

「私も年取ったね」と、

白髪を探す婆ちゃん。

「婆ちゃん」ガビも年を重ねたけど、お互いを意識するが、濃密な態度はなく、当り前の一日を、当り前に過している。

婆ちゃんは夜寝る前に一言ガビに言う。

「今日も一緒にありがとう」と。そして、ミモザと小太郎にも写真に「おやすみ」を言うことにしている。

ガビ、地震の時も、雨の日も一緒にいようね。と当り前のことを語りかけている。来る年も一緒にいたいものです。

動物たちの

東日本大震災

あきる野市

為谷 由美子

東日本大震災から6年に

なる。

3・11前までは、人もそうだが牛、馬、豚、犬猫など沢山の動物たちも穏やかな日々を過ごしていたと思う。

あの震災で一番強烈に印象に残っていることは、福島県の内原発事故、20キロ圏内の住民すべてに避難命令が出、ペットを連れて避難された方の中にはいらしたが、数日で帰れると思いいペットを置いて避難された方も多かった。

私も猫を飼っているのですが痛いほどの心配や苦しみが無いほど分かるし、また誰もいない町で過ごしている動物たちのことが心配で悶々と日々を送っていた。

夜空の美しい月を眺め、あの月の下で動物たちはどうしているのだろうかと思いい一日も早く事が収まることを祈った。

後になつて聞くとここに

よると、犬猫の80パーセントは、餓死や衰弱死で亡くなったそうである。

又、衝撃的だったのが大動物の牛などは殺処分となった。

月日が流れ、我が家に1頭の犬を迎え入れる事になった。

福島第一原発のある大熊町で1年8ヶ月過酷な状況の中で生き抜いた子である。

たぶん餌の奪いあいだと思いますが右の耳が折れ、身体はガリガリで中型犬より大きいミックスの子であった。

名前はトニー。福島の犬猫保護施設でしばらくお世話になっていたので、すぐに私達にもなついてくれた。

おとなしく、穏やかで優しい子だった。

沢山話かけ、散歩も沢山した。

お花見、ドンドン焼き、

薔薇フェスティバル、川沿いを歩いたりと楽しい思い出を残してくれた。

夕方の散歩は主人だったが、家族の一員である事をトニーにも分かって欲しく必ず外まで出て見送った。

嬉しそうに元気に歩く後ろ姿、そして夜空の月を眺め、1頭しか迎えられなかったが、トニーがうちの子に来てくれて、感謝一杯で月を眺めた！

大げさに思われるかもしれないが、私にとって幸福感を感じるひと時であった。苦勞した子であることも分かっていたし、とてもなついてくれてトニーと私の信頼関係も深まり絆も出来

愛しさが増すばかりだった。そんなトニーも我が家に来て、1年11ヶ月急に胃捻転で旅立った。

28年8月13日お盆の日であった。

百ヶ日が過ぎ慈恵院さんにお骨を収めた。

明日、合同墓地に入れて頂けるとは分かったが、時間は何時になるか分からないとの事だった。



自宅に着き、仏壇に手を合わせる同時に、市の4時半のチャイム、童謡の「ふるさと」のメロディーが流れた。今まで気にとめていなかったが、「ハッ」とした。

トニーは故郷福島に帰ってきたのではないかと思

った。

翌日、車を運転していたら、不思議な事に10時頃に童謡の「ふるさと」のメロ

ーが耳に入り、トニーの笑顔が脳裏に蘇った。

きつとこの時に、合同墓地に入れて頂き、故郷福島にトニーの魂は飛んで行ったのではないかと思つた。とても不思議な体験だった。

住み慣れた町、亡き人々、沢山のお友達や思い出も沢山あつたに違いない。

私はトニーと過ごした年月は短かったが、縁あつて出会えたことに感謝し、トニーのすべてが好きだったし、これからも思い出を大切にしていきたい。

最後に、東日本大震災で人や沢山の動物たちの命を亡くした。

あの震災さえなければ、人も動物たちも穏やかな日々を過ごしていたらう。

亡くなられた皆様のご冥福を心より祈る。